



今回のイギリス旅行では、多くの驚きと発見ができ、とても楽しい12日間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。次回もぜひ参加したいと思います。3月10～11日に訪問したクラフトでは、自分の犬を連れて訪れている人がたくさんいました。まっすぐ歩くことも難しいほど込み合っている会場でも、どの犬も不安がらず堂々としていました。また、人も犬もマナーがよく、会場は臭いも吠え合う声もなくとても気持ちのいいものでした。たくさんの犬と触れ合い写真を撮りましたが、たいいていの犬は、社会化ができておりとてもフレンドリーで基本的なトレーニングも入っていました。飼い主も私たちにとても優しく、自分の犬と見ず知らずの私たちとの触れ合いを快く承諾してくれて、笑顔で接してくれました。写真を撮っても良いか尋ねるとみんな「もちろん」と、とても快く喜んで了解してくれました。みんな自分の犬をとても信頼し、自慢に思っているようでした。

ある柴犬の飼い主は、『柴犬』のことをとても賢い順応性のある犬だと褒めていました。この飼い主は、日本人は自分の国の柴犬をトレーニングしにくい犬だとか、きつい犬だと言い、他の国の犬をとて頭が良い犬だと褒めると話してくれました。実際日本には日本犬より外国の犬を欲しがったり、外国の犬のほうが賢いと考えの人がたくさんいるように思えます。しかし、この飼い主は、柴犬はとても穏やかで賢い犬だと、非常に褒めていました。確かに、彼女の犬も、この会場に来ていた多くの柴犬も、みんな穏やかな優しい顔をしていて、人にも他の犬にもとてもフレンドリーでした。日本で考えられている柴犬のイメージのほうが間違いに思えてきます。おそらく、日本人は飼い方や環境によって、形成された犬の性格を、その犬の本来の性質だと考えてしまっていると思います。ホルモンの異常などにより精神的に不安定さを引き起こすような病気を持っていないならば、どんな犬でも、愛情をかけ、社会性を身に付けさせるような飼い方をしていれば、従順で穏やかさを持った犬になるはずです。すべては、飼い主のあり方と、周りの環境に左右されるものだと思います。

会場ではフライボールに参加した子供達にも会いました。自分たちでトレーニングを行い自信たっぷりに競技を行っていました。犬たちも子供たちも、そして観客もすべてが楽しみ、喜び合えるものでした。子供たちは必死に犬に声をかけ、成功した犬にも失敗した犬にも同じように褒めていました。勝つことは素晴らしいけれど、それだけが目的なわけではなく、一緒に参加して、必死に頑張り楽しむことが最大の目的なのだと思います。英国人は子供のころから犬と楽しみながらトレーニングを行い、共に信頼関係を結んでいるのだと感じました。どんな場合でも褒める。失敗しても頑張った犬を褒めることにより、次につながるのだと思います。

また、シェルターから成犬でもらってきたという、ボーダーコリーもいました。この犬も、アジリティに参加したそうです。たとえ子犬のころからアジリティをさせるためにトレーニングを行ってなくても、この子のように、クラフトに参加できるほどの犬になれるそうです。しかも、この子の飼い主はプロのトレーナーなどではなく、一般の中高齢の方でした。自分たちの楽しみと運動を兼ねて、アジリティの練習に行っている感じで、ごく普通の穏やかな方たちでした。自分たちの力は全く自慢せず、すべてがこの犬たちと出会えたことに感謝をし、自分たちは何も教えたり要求したりしていないが、犬たちが自ら与えてくれるのだと話してくれました。とても温かく幸せな家族に出会えました。

クラフトで悲しいことも知りました。クラフトで出店していた中に、いくつかグレイ・ハウンドのシェルターがありました。レースで使われている犬たちが、レースで勝てないようになると、捨てられるというのです。その犬たちを保護し、リホームさせる団体がたくさんあるようです。レースが盛んな国なので、このような問題が起こるようですが、やはりどんなに動物の住みやすい国であっても、一部の人間の利益や娯楽のために犠牲にあう動物がいることを実感し、悲しく思いました。しかし、日本との大きな違いと救いは、この犠牲にあった動物たちを救おうと努力する人間がこの国にはたくさんいるということです。そして多くの人がその考えに賛同しているということです。そのお陰でたくさんの動物に幸せな未来が開かれるチャンスが与えられています。これは、今の日本と大きく違うところです。

イギリスでは、バスやパブ、ホテル、そして色々な公共施設に犬を連れて入ることができます。それが当たり前のようにです。どこにでも一緒に連れて行けることは、とても幸せで羨ましく感じます。犬の社会性がしっかり身につについていて、飼い主のマナーも良いから実現できているのだと思います。日本には、

マナーの悪い飼い主や、社会性を学ぶことができなかった犬が数多くいるので、このような公共の場に連れて行くと苦情が出るのだと思います。「トラブルが起こると困るから、公共の場への持ち込みは認めない。」という体制が今の日本の実情ですが、まずは、動物とうまく共存していくための学習できる場の提供がもっとたくさんあれば良いと思います。勉強する場がもっと身近にあれば、トラブルは軽減されるはずです。トレーニングも、犬だけを施設に預けて行うような体制は無意味で、まず第1に飼い主が学習するべきです。飼い主と犬とのコミュニケーションが日本では足りていないように思います。自分の家族同様に接していれば、自然と信頼関係が生まれてくるはずです。知識がなくてもお金を払えば誰でも買えるようなペットショップの数以上に、学習する場が必要だと思います。

また、日本と大きく異なると感じたことは、公園での出来事でした。イギリスでは、公園の中では、どの犬もフリーでした。犬同士が出会っても、お互い友好的に接していました。飼い主も当たり前のように平然としています。日本人ならば、向こうから見知らぬ犬がフリーで近づいてきたら、おそらく飼い主は緊張して、その緊張が犬にも伝わり…。悪循環を引き起こし兼ねません。イギリスのように、犬が広い公園で自由に走り回って、自由に犬同士が挨拶できるような環境があることは、とても羨ましいです。そして、当たり前ですが、その公園には小さな子供や、ベビーカーに入っているくらいの赤ちゃんも訪れます。しかし、子供たちも犬を全く怖がりません。犬も子供のことを怖がりません。日本の



ように、犬を見て甲高いキーキーした声を出すような子供は1人もいませんでした。むやみに追いかけようとする子供もいません。だから、子供を怖がったりする犬もいないようです。子供の親が日本の親と大きく異なると感じました。日本では、犬が近くにいると、犬から子供を遠ざけたり犬は危険だと教えたりする親がたくさんいます。逆に自分の子供が犬に急に手を出したり、甲高い声を出して犬を追いかけていたりしているのを、放ったらかしにする親もいます。そのために子供を怖がり嫌う犬が日本では増えてしまうのです。人